

【ぎょじん】

笑う魚の話は、村びとの噂できいたことがありました。

笑う魚は【ぎょじん】と呼ばれていて、「魚人」と書くとのこと。

笑うのは人間と一部の動物だけで、魚や鳥は笑わないという先入観がありましたから、【ぎょじん】に逢ってみたくて、たまらなくなりました。

しかも【ぎょじん】の姿は、胴体だけは魚なのだが、頭部が虎で、豹の四つの足があり、尻尾は獅子という噂ですから、よけいに逢いたい。

「どこにいけば、あえるのかのう」

懐爺にききました。

「どこの川にもいますよ。でも小川が安全でいいかもしれません」

それで小川に行ってみました。

「【おじん】よ【おじん】よ、でてこいや」

するとすぐに、

「【おじん】じゃあねえ、【ぎょじん】じゃあ」

川の底から、気味のわるいおやじが飛び出してきました。

「なんだ、やっばし【おじん】じゃんか」

頭部が虎で、豹の四つの足があり、尻尾は獅子という噂は嘘かい。

ただ胴体は、しなびた鱗（うろこ）におおわれている。

「ぎよぎよぎよ。ばれたか。例の噂はおれが流したんだよ」

「どうしてじゃ」

「どうしてって、こんな【おじん】みたいな姿じゃ、だれも興味をもってくれないだろ」

「わらうってえのも、うわさだけかい」

「それは本当さ。ぎよぎよぎよ。な、笑っただろ」

「にんげんのさ、せかいではさ、ぎよぎよぎよは、おどろいたときのもんで、わらったとはおもわれん」

「おれは笑ったつもりなんだけどさ。ぎよぎよぎよ。駄目かい」

「だめじゃのう」

「どうすればいいかな」

困惑（こんわく）の表情でぼくを見ます。

「そうじゃなあ。ははは、とか、わはは、とか、ぎやはは、とか、いひひ、とか、ぶふふ、とか、おほほ、とか」

「むずかしいよ。でも、ものは試し、やってみるかな。ぎよぎよぎよ」

「だめじゃのう」

「声帯のせいかなあ」

「あたまのせいじゃろ」

「ひどい言い方だなあ」

「いんや、そういういみでのうて、あたまが、ぎよぎよぎよに、なれとるんじゃ」
「どうすればいいかな」

「なまえを、かえるんじゃな。【ぎよじん】だから、ぎよぎよぎよになる。【ははじん】なら、はははになるかも、しれんからのう」

「そうかそうか。おれは、ひひひと笑いたいから【ひひじん】にしようかな」

「それがええのう」

ぼくの忠告に従って、【ぎよじん】は【ひひじん】になりました。

そうして、胴体の鱗が、狒狒（ひひ）の毛になった【ひひじん】は、川をはなれて山に入りました。

懐爺によると、大山でも中山でも小山でも、ひひひという笑い声がきこえたら、それは【ひひじん】の笑い声だそうです。